



TITLE:

ブルゲン氏の諸社會主義評論(譯一)

AUTHOR(S):

田島, 錦治

---

CITATION:

田島, 錦治. ブルゲン氏の諸社會主義評論(譯一). 經濟論叢 1927, 24(2): 349-362

ISSUE DATE:

1927-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128507>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二號

第二十四卷

昭和二年二月一日發行

## 論 叢

印紙稅廢止論

教授 法學博士

神戸 正雄

生物の美的進化

教授 理學士

川村 多實二

露西亞の新經濟政策と農業

教授 法學博士

河田 嗣郎

## 說 苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田島 錦治

英國勞働黨の銀行國有論

助教授 經濟學士

谷口 吉彦

物價指數の意味

講師 經濟學士

蜷川 虎三

## 雜 錄

町人の財力と士農兩階級

教授 經濟學博士

本庄 榮治郎

Populationistik につきて

教授 法學博士

財部 靜治

英吉利の國際海運收入

教授 經濟學博士

小島 昌太郎

獨逸帝國銀行の發券制度

助教授 法學士

汐見 三郎

## 法 令

健康保險特別會計規則・健康保險法施行規則

# 說苑

## ブルゲン氏の諸社會主義評論（譯一）

田 島 錦 治

### 緒 言

佛蘭西の經濟學者モーリス・ブルゲン氏は千九百四年に「諸社會主義及び經濟的進化」と題する一書を公にせり。其修正されたる第三版は千九百七年に刊行せられ、此種類の著書中の最良なる者の一として聞ゆ。今其目次の大要を述べれば二部四卷十八章及び追加九より成り、第一部は社會主義的社會の諸理論、諸系統と題し、之を二卷に分ち、其第一卷に於て純集産主義及び其價值制を論じ、第二卷に於て需要及び供給に支配せらるゝ價值制を維持する社會主義的形態を論ず。第二部は經濟的進化の諸事實と題し、又二卷に分たれ、第一卷は現代に於ける經濟的組織の諸形態の發達を論じ、第二卷は事實より引出せる歸納の題下に諸社會主義を評論す。今余が茲に先づ譯出するは第一部第一卷にして、本號より其第一章を掲げ逐次連載するの勞を

- 1) Maurice Bourguin, *Les Systemes socialistes et l'evolution economique.* 3e éd 1907.
- 2) Le collectivisme pur et son régime de la valeur.

執らんと欲す。

前述の如く第一部第一卷の標題は「純集産主義及び其價值制」にして、謂ゆる純集産主義とは生産方便のすべて即ち土地及び資本の社會化を目標とし、彼の土地國有論や又は都市社會主義の如き生産方便の一部を國有又は公有とする主義即ち不全集産主義と異なる。純集産主義の價值制は亦其特色あり。即ち價值の決定は需要及び供給の法則に由らすとなし、又は由らしむべからずとして、勞働を以て價值の唯一なる原因、要素及び計量なりとす。此主義の管に學理上大なる誤謬を含むのみならず、實行上にも排除し難き大障礙あることは高名なる經濟學者の往々指摘する所なり。余亦自から揣らす曾て本誌に屢々投寄したる論文に於て之を反覆論述したり。例せば大正十一年の一月三月四月の各號に連掲したる「マルクス氏餘剩價值説の評論」同年九月號及び十二月號に載せたる「マルクス氏の集産主義の實行難を論ず」大正十二年一月號に掲げたる「新餘剩價值説及び社會階級協和論」(此論文は大正十五年七月の Kyoto University Economic Review に英譯して掲載せり)及び大正十四年一月號に「産業集中に就てのマルクス説の謬想」と題して掲げたるもの皆是なり。

而して今や茲にブルゲン氏の評論を譯出するは前掲余輩の諸論文が余輩の私見に止まらざるを證し、併せて後進の人々をして一層深く經濟の學理及び實際に通曉せしめ、彼等を往々誤導

し又は蠱惑することある社會主義の本體を明かにするの一助と爲さんと欲したればなり。

ブルゲン氏は第一卷を次の六章に分てり

## 第一章 集産主義社會の設計

## 第二章 集産主義の粗圖及び其價值單位の意義

## 第三章 生産の進歩

## 第四章 經濟上の均衡

## 第五章 集産制の社會に於ける自作農、工匠、店主

## 第六章 結論、集産主義と自由

# 第一章 集産主義社會の設計

純集産主義は次の二を其特徴とす。(1)富の生産循環及び交易の手段たる物は、すべて國民共同の社會に屬し、且其社會の手に由りて管理せらる。(2)諸種の勞働及び諸種の生産物のすべては、勞働者等が資本家より上前をはねらるゝことなく、彼等の勞働に比例して生産物を受取り得る様に、費やされたる勞働の量に従ひ勞働の單位にて計られたる價值を有す。

此大なる社會主義的組織の方式は、異なる著者に依り説述せらるれども、現代社會主義の諸

師の著書にも、又彼等の直系の弟子等の著書にも、詳かに公表せられて居るものを見出さず。抑余輩が後に注目する如く、先づカール・マルクス及びエンゲルスの書物を熟く檢閲して、其内に含まるゝ諸方式を引出すことを要す。

カール・マルクスは常に未來の社會を記述するを忌避す。其著「資本論」の中に於て、彼は彼の「價值及び餘剩價值」の説を展開し、之に依りて賃銀勞働者をして無償にて資本家に餘剩價值を提供せしむる一制度を批判す。彼は資本的掠奪の罪惡弊害を縷述す。彼は諸生産方法の歴史的進化を説明し、以て此進化が必至的に(1)資本所有者の財産沒收(expropriation)(2)生産方便たるすべての財(其中に土地を含む)の社會的共有及び(3)社會的運用に歸着すべきを證明す。然れどもマルクスは此重要點に達するや、更に論歩を未來に對する彼の考に進むることを避け、『未來の鍋の内容を豫め献立する』の愚を冷笑す。

此忌避は弱志か、無力か、慎重か將た憶病か。弟子等は曰く否然らず。彼等の大師の沈黙は彼等、亦遵守する所、之を以て講學的理由(les raisons doctrinales)によるものと爲す。今彼等の辯解する所を述べば下の如し。

若し集産主義制(Le régime collectiviste)がフーリエ氏の「ファランステール」(Le phalanstère de Fourier)又はカベ氏の「イカリー」(l'Icarie de Cabet)の如き、改革者の頭腦より出づる人工的意

1) *Le capital* 卷一 Roy 譯 p. 340 及ヒ 349. Librairie du Progrès. 1875, in-4.°

匠、又は團體が其熟慮せる意思の力に依り適用せんと要する「種々の部分より造らるる組織」ならむには、未來の都會の設計を描き、又之を展開して、立法者をして此提出せる標本に順應する社會を造るを得せしむる様にするを實に必要とするなるべし。然れども、斯の如きは前代の空想的社會主義 (le socialisme utopique) の意義と大に異なる現代の科學的社會主義 (le socialisme scientifique) の意義に非ず。此主義の示す如き諸生産方便物の共同所有を特徴とする社會形式は人の理想的又は任意的構成物として表示せられたるに非ず。此制度 (régime) は其深き根柢を現實 (la réalité) の下即ち現代の社會生活の下に有ち、且内在する諸力の働に由り遂に資本主義的制度の地底を出で、之に代りて現はるべきものなり。恰も獨立せる小生産者の私有財産が、常に益々大なる生産方便物を要する所の益々巨大なる生産の諸要求に對抗するを得ずして、「他人の勞働の使用に基づき増大する資本家財産」に併吞せられたる如く、資本家財産は漸増する資本の集中及び資本制度 (le régime capitaliste) に固有なる矛盾に因り、必ず其順番として社會的財産に自から變形すべきなり。此事たるやヘーゲル氏の説の通り、實世界の辯證法的變動 (le mouvement dialectique du monde réel) の諸反對事項の抗爭に因りて自から生ず。詳言すれば、生産方法の社會的性質と富の專有の方法の私的性質との間、各工場内の勞働の系統的組織と現社會の内部に於ける生産の不統一 (l'anarchie de la production) との間、一方に於ける生産の擴張性と他方に於

ける市場の制限性との間の抗爭に因るなり。

マルクス派の言葉を用ふれば、上述の事項はそれ自身に一の新しき社會の形態を仕上げる所の物質的諸條件の既に現存し又は成立の途に在るものなり。ガブリエル・ヅヅィル氏曰く、今より吾人は此等の條件を研究し、未來の社會の組織の細目を整頓するに吾人の時間を損失すること無くそれに順應し得る爲に此等を能く認識するを以て本分と爲すことを要す。何れの時代にも、その仕事あり。未來を規定するが如き豫想を有つ勿れ、唯吾人は現在に専心するを以て満足すべきなりと。<sup>1)</sup>

リーブクネヒト氏亦同様の宿命説を抱く。氏が「コスモポリス」誌上に掲載する長論文の標題「未來の國家」は讀者に向て羊頭狗肉の欺瞞を敢てするの謗を免かれず。<sup>2)</sup> 何となれば氏は吾人が寸時の先にかかる事を豫知し、及び事件の間斷なき經過の裡に於て現在と未來との限界を甄別する能はざる理由を口實として、何等未來國の圖案を描かざればなり。氏は未來國に就ての諸質問を以て小兒の遊戲に均しと思へり。彼は未來國の出現に對する現在の諸障礙を除くを緊要と爲し、新なる諸形態は社會を生かしつゝある生活の力に依りて有機的に生長すと思考す。

ヴンデルゾルド氏は千八百九十五年、白耳義ブラッセル市の某誌に招かれ、集産主義的社會の諸機關を詳述せられんことを求められたるに、氏は亦之を拒絶したるが、其理由は「實證主義的

1) Gabriel Deville, *Principes socialistes*, p. 38 et 39. Giard, 1898, in-12.  
2) Liebknecht, *Zukunftstaatliches*, Cosmopolis, Januar, 1898.



社會主義者 (Les socialistes positivistes) は新なる諸設計に従ひ俄かに社會を改造せんことを欲する社會的建築師に非ず」といふに在り。<sup>1)</sup>氏は唯何人も細目を辨知すること能はざる如き模糊たる下畫を示すに止まる。

ジュール・グールド氏 (Jules Guede) も亦千八百九十六年に佛國代議院の演壇に於て、同様の態度を執れり。氏曰く『社會主義的空想の時代は幸にも過ぎ去れり。今日の社會主義者は事實の學派 (l'école de faits) に屬す。彼等は豫言せず、唯觀察し論斷す。ゾ・マン氏 (M. de Mun) 反對黨の一人) は……余輩を督促して彼の理解し得る様に未來の事情を詳説し、此未來の共同財産の社會に於ける勞働の分配の狀況を明示すべきを以てせらる。余は氏に此點に附て満足を與ふるを得ず、余の黨友亦同じ。勞働者も亦斯く多くを願はず。……。余輩は唯次の事項を認むるに止むべし。即ち未來の社會に於て勞働者は無產者の地位を脱して、生産方便物の共同所有者となるが故に、勞働の生産物は上前を割がれること無く、すべて彼等の手に歸すべし』<sup>2)</sup>

カウツキー氏も亦「未來國」に關する構圖を不要とす、何となれば、國家がそれ自身に自から供給を爲す大經濟集團に變形することは、嘗に願はしき事なるのみならず、實は勢ひ免かるべからざるの數なればなり。思想家等はいくらか經濟的運動の方向を認むるを得べしと雖も、彼等の勝手に其運動を定むるを得ず、又其運動の取る所の形式を正確に豫知するを得ず。故に社會主義に

- 1) Destrée et Vandervelde, *Le socialisme, en Belgique*, p. 395, Giard, 1898, in-12.
- 2) Discours du 16 juin 1896, Journ. Off., Déb. parl., Ch. des déps., p. 967, col. 3, et 968, col. 2.

要求するに未來の社會の設計及び過渡の方法を記述すべきを以てするは、笑ふ可きなり。社會民主黨員は假定の上に置かるゝ幻想より離れ、經濟の發達が社會主義的基礎の上に置かれたる時に取らるべき方向を詮索するを以て足れりと爲すべきなり。

社會主義者の數回の會議に於て、マルクスの方式は常に嚴守せらる。エルフルト會議の綱領、即ち千八百九十一年以後獨逸社會民主黨の綱領となりしものは、次の如きに過ぎず。『常に増大しつゝある社會的勞働の大なる使用及び生産力が、從來使用せられたる諸階級に向て爾後困窮及び壓抑とはならずして、最上の善及びすべての意味に於て調和する幸福の根源となる爲めには、他なし、生産方便物即ち土地、鑛山、工場、機械、工具、運輸機關等の私有を變じて社會の公有と爲し、及び營利を目的とする私人の商品的生産を變形して社會がそれ自身の爲に自から施行する社會主義的生産と爲すに在るべし。』千八百九十九年十月のハノヴル會議 (Le congrès de Hanovre) はベーベル氏の提案に従ひ、決議事項を諸生産方便物の社會的公有、社會的生産及び交易の方法の設定と爲すに止め、而して此生産及び交易の方法に就ては特に何等指示する所なし。

以上縷述せる如く社會黨は久しく傲慢にして且謎の如き言動を取てしたるが、到底斯の如き態度を持すること能はず。彼等の謂はゆる生産方便の社會的公有は生産及び交易の或一定の方法、及び價値の或一定の方式システムを度外に措いては理會し得べからず。且彼等は生産方便物の社會有を豫

1) Karl Kautsky, *Das Erfurter Programm*, p. 131 et s., Stuttgart, Dietz, 1892, in-12; Préface de *Ein Blick in den Zukunftsstaat* d' Atlanticus, Stuttgart, Dietz 1898, brochure.

言する以上は少くとも其時の社會組織の要項丈でも説明すべきに、之に言及せざるは、其言ふ所が既に過ぎたるか、又は及ばざるかの批難を免かれず。即ち彼等は其當然に負ふべき説明の義務を忌避する者と謂ふべし。

尙且純マルクス學說に於ては決して其弟子が社會化する財産制度に就て種々の判斷を爲すことを禁せず。たゞそれのみに非ず、マルクス自身すら其「資本論」の序に曰く、たゞひ社會は其自然的進化の諸經路を一飛に通過し、又は法令に由り此等を廢除するを得ずとも、社會は懷妊の期間を短縮し、及び分娩の苦痛を緩和するを得べしと。此考を實行せんには、社會が其將來の目的を意識することを必要とすべきなり。

蓋し沈黙は戰略的打算以外の理由を有せざる如し。然るに世人の徒らに知りたがる好奇心に満足を與ふることを際限もなく拒絶すれば、「一學說にして其實證的部分 (sa partie positive) に就て自から確かむる能はざるは即ち其學說の空虛を證す」といふ反對論者の鋒鏑を鋭くするは必然なり。若し哭して(渠座派の言ふ如く)新社會の形態が有機的發育 (développement organique) に由りて舊形態より現出すとせば其下拵へが充分に進捗せる時には形態各部——その成形は殆んど成就せんとしつゝある——を豫知するを待べき筈なり。故に質問の應答を避くるは「新社會への進化は之を望見する爲には餘りに遠方に在る」ことを暗に自白すると同じからずや。況んや此思想

家の背後に一人の直立せるあり、黒き腕を扼し燃ゆる眼を輝やかし、逼り且脅かしつゝあるをや。沈黙するは益々危険となれり。此人や彼の希望の實現の爲に幾世紀を待つを欲せず。彼亦約された土地 (La terre Promise 新社會を指す) を豫見せんと欲す。即ち斯くも神秘に又斯くも混沌たる此社會主義的未來を隱蔽する幕の開かれんことを望む。されば此人は不謹慎なる反對者として謝絶さるべきに非ず。

人或は曰く佛國大革命の起れるや、第十八世紀の人々は新社會の政治的及び社會的形態を豫言するを得ざりき、又第三級民 (Tiers État) の支配より、資本主義制より、及び諸階級闘争より結果せる所の經濟上の大變形を先見するを得ざりしと。是亦無益の言なり。此大革命が事實の下に於て成就せらるゝ前に智慮の下に於て爲されたりとは、今や何人も知れる眞理なり。ルキ・ブラン (Louis Blanc) 氏は其著「勞働の組織」(l'Organisation du travail) の緒論に於て言へり、曰く、此革命の破裂せる時、各人は其プログラムを作るを得たりと。實に此プログラムは全く其世紀(十八世紀ヲ指ス)の文學の中に、及び八十九年(一七八九年即チ革命ノ年)の諸記録の中に在り。

勿論、第二十世紀間に於ける科學の進歩に伴ふ資本的生産の擴張、及び之に由る社會の變形は、革命當時の諸人の先見し能はざりし所なり。然れども世人は現代の社會主義者に向て、事物自然の趨勢が集産制の社會を組立つべき所の有機的設備 (l'appareil organisé) の側へ引き寄せる

諸力の位置移轉を豫言すべきを望ます。世人は唯此設備の構造及び其作用の——勿論それ等の詳細の事項に亘らすとも——重なる各部を説明せんことを望むなり。實に、此仕事の困難なるべきは千七百八十九年の大革命を準備し及び遂行せる諸人のそれより大なるものあるべし。蓋し諸人は重に諸の特權、制限的條規、封建的賦課の廢棄を目懸けつゝ、彼の自然法則學派 (les Physiocrates) の言へる如き「人間社會の自然的本體的秩序」(l'ordre naturel et essentiel des sociétés humaines) に適合する社會の設計を豫め考案するを得たりしなり。彼等は社會の内部の諸重要機關を保存しつゝ、唯此等機關に對する人工的障礙を除きて各個人をして自由に其力を伸ぶるを得せしめんと努めたるなり。之に反して現代の社會主義者は一の新なる社會の設計を爲さざるべからず、而して其社會に於て廢止せらるゝ諸機關は全然新なる組織に改造せらるべきものなり。其仕事の一層困難なる亦以て見るべきなり。

たゞひ斯の如き困難あるにも拘はらず、最早沈黙を守るを得ざるの時は遂に來れり。ジョーレ―氏が千八百九十五年の著書に次の語あり『吾人は明日如何になるやと問ふ者あらば吾人は之に答へざるべからず』と。

集産制の方式に就て最初に考案を試みたる人は今を距る遠き時に在り。獨逸のロードベルツス氏は社會主義のリカード―と呼ばれ、ラッサールの師にて、カール・マルクスの先輩なるが、氏

1) Jaurès 氏 / *La société collectiviste* (1895) / 序文並ニ同氏 / *L'application du système collectiviste* (1899) / 序文ヲ見ヨ

は千八百四十二年來其純然たる抽象的性質を有する著書に於て、勞働を基礎とする價值の理論を發表し、且一の假定的社會に於ける此等理論の應用を示せり。此の假定する社會に於ては所得を生ずる私有財産なく私的資本なく、國は社會資本の唯一の所有者として總て生産を管理す。又此社會に於ては勞働者は彼等の勞働に由て生産したる價值に相當する簡單なる切符を受取り、之を以て社會的生産物の中に就ての彼等の分前を公共倉庫より引き出して以て彼等の生活の需要を満す。氏が此研究を企てたるは、現在の狀態に對して一層良好なる狀態を示さんとする爲めに非ずして、寧ろ兩者を比較するに由りて一層能く各々の性質を明かに知るに在り。氏は此試みを爲すこと二回に亘り、以て正常的勞働の一時間に由て表はさる、價值單位に就ての一層深き解説を與へたり。即ち之に關する重なる著述は一八五二年に作れる「フォン・キルヒマン宛の第四の社會的書簡」にして、これは氏の歿後十年即ち一八八五年に「資本」(Das Kapital)の名稱にて刊行せられたるものなり。氏の記述する國家は純共產主義のそれと明白に區別すべきは勞働者が彼の生産したる物の價值の全部の上、即ち此價值の計算を以て彼が取得する「消費の目的物」の上に個人的所有權を有し得る點に在り。故に氏の説は最も嚴重なる又最も完全なる意味に於ての眞正の集産主義なり。尙ほ氏は此主義の實施せらるゝは餘程遠き將來に在るべしと思考したり。<sup>1)</sup>

同じく千八百四十二年に、同じく獨逸人のウィルヘルム・ワイトリング氏は半ば共產主義的に

- 1) Rodbertus, *Zur Erkenntniss unserer staatswirtschaftlichen Zustände*, p. 119-125 et. 165-173. Neubrandenburg, Barnewitz, 1842, pet. in-8.
- 2) Rodbertus, *Zur Beleuchtung der sozialen Frage*, 1re partie, p. 320, 2<sup>e</sup> éd. Berlin, Puttkammer, 1890, in-8.

して半ば集産主義的なる一社會の設計を立て、アントン・メンガー氏は其の短き解説を下せり。<sup>1)</sup>  
會て垺國大臣の職に在りたるシェッフレー氏が千八百七十四年に始めて刊行せる「社會主義の精髄」(Die Quintessenz des Socialismus)と題する書は、純集産主義の解説として最も有名なり。  
但しシェッフレー氏は集産主義者に非ず、氏は社會主義の基礎的要項(Les données fondamentales)より論歩を進め、其諸結果を科學的に演繹し、斯くして氏は唯此主義の反對者に向ては彼等の常習的に行ふ難詰に誤謬の箇處あることを示し、同時に此主義の賛成者に向ては彼等の理論に缺陷あることを示したるなり。

米人ベラミー氏(Belamy)は學識に於て前記諸氏に劣り、想像に於て優る。氏の千八百八十四年に公にせる有名なる小説 Looking Backward は前述と同様の主義に依りて組織せらるゝ西曆紀元二千年の社會を描きたり。英人ウィリアム・モリス氏は亦同じ頃に同じ種類の小説を著はしたれども、其書中には新社會の内部の組織を詳説せず。<sup>2)</sup>次に獨人ベール氏は千八百八十三年に初版を出せる「婦女及び社會主義」と題する著書中の或一章に於て集産制度を記述す。<sup>3)</sup>

社會主義の著書は其積極的部類の方面は猶不充分乍ら漸次増加したり。然れども最近に出たる社會組織の設計は通常の集産主義の型を多少離れて、此主義の最も弱點とする箇處に就て之を修正せんと試む。ジョーレー氏は其千八百九十五年に公にせる「社會主義的組織」(Organisation

- 1) W. Weitling, *Garantien der Harmonie und Freiheit* 第一版 1842. Anton Menger, *Le droit au produit intégral du travail*, 佛譯 Bonnet, p. 239-231. Giard, 1900, in-12.
- 2) W. Morris, *News from nowhere*, London, Longmans, 5th ed. 1897
- 3) August Bebel, *Die Frau und der Sozialismus*,

socialiste) の書中に於て、集産制を以て現代の資本制の後を直接に受け繼ぐ運命を有するものと爲し、而かも集産制は絶対自由の共產制 (ie communisme libertaire) へ動亂なしに平和に進化する道程に在りと説明す。氏は忠實に勞働時を以て計らるゝ價值の理論を墨守すれども、氏は生産者の諸集群に或一定の自治權を與へて集産制を緩和し、又價值單位の基本を修正して勞働者を生産の進歩に密接に關係せしむることを努む。

佛人ジョージ・ルナール氏 (Georges Renard) は千八百九十七年、其社會主義の制度 (Régime socialiste) と稱する論文に於て價值決定の原因に向て幾分か需要及び供給の作用を加味して、集産制の型を大に改めたれども、同時に交易の仲介として勞働切符 (bons de travail) の使用を禁止せんとせず。氏はジョーレ氏の如く、集産主義を寛廣にし且緩和する爲に、正義及び博愛を注入し、且獨逸社會主義の唯物的權柄的意想とは始めより相容れざる佛蘭西の眞の傳統慣例に適合せしむる様に自由を多く注入せんと努む。

千八百九十六年と九十九年とに於て米人グロンランド (Gronlund) と瑞西人シールツ (Sulzer) の二氏は益々集産主義を畸形に爲したり。二氏は集産主義の下に於て全般に亘り需要及び供給の法則を適用す。此理由に本づき、たとひ二氏は尙ほ金屬貨幣を排斥すれども、二氏の主義は前述ジョージ・ルナール氏と同じく純集産主義の研究の範圍外に在るべきものなれば、余は此等を次卷に於て講究すべし。(第一章終り)

1) Revue socialiste, 1897 et 1898. 其後冊子トシテ出版セラル即チ *Le régime socialiste*, 第三版 1903. in-12.